

多喜二書き込み、および小林多喜二伝 補 5

倉 田 稔

も く じ

はじめに

- 1 多喜二の小樽高商（現・小樽商科大学）図書館所蔵雑誌等への書き込み
 - 1-1 多喜二の書き込みがあるもの 1-1-1 書物
 - 1-1-2 雑誌 1-2 多喜二の書き込みがないもの
- 2 その他
 - 2-1 乗富道夫 2-2 東俱知安 2-3 旅行 2-4 温泉 つづき
 - 2-5 『党生活者』削除問題 2-6 『母』 2-7 北海製罐
 - 2-8 森良玄 2-9 村山 2-10 浜林講演から 2-11 雑
 - 2-11-1 生前 2-11-2 没後
- 3 不在地主
奥野善造の場合 その後
- 4 中国・河北大学での「多喜二シンポジウム」での私の報告
- 5 蒔田栄一の思い出から
- 6 参考文献

はじめに

本稿は、およそ3つの部分に分ける。そして多喜二伝補遺5である。補遺は今まで、1, 2, 3, 4, と書いてきた。ただし、1, 2は、拙書『小林多喜二伝』（論創社 2003年）に入ったので、3, 4 および、この5がレゾンデタがある。3, 4は、それぞれ、「小林多喜二伝 補3 および『小林多喜二伝』索引」（『商学討究』第54巻第4号, 2004年3月）, 「小林多喜二伝 補遺(4)」（『商学討究』第55巻第4号, 2005年3月）である。

1 多喜二の小樽高商（現・小樽商科大学）図書館所蔵雑誌等への書き込み

私は、白樺文学館多喜二ライブラリーの依頼で、小林多喜二の小樽商大図書館の書物・雑誌への書き込みがないか、渡辺理君とともに調べた。

結論からいうと、いくつかの雑誌に書き込みがあった。

この件は、『朝日新聞』2003年11月7日朝刊29面、『北海道新聞』同11月7日夕刊14面、『日本経済新聞』同11月11日朝刊39面、『京都新聞』11月6日に出た。

私は探索の方針として、1. 多喜二在学中以前に発行された文献、つまり1924年3月までの刷年の書物と雑誌、ただし1924年以降に受け入れた書物は除外した。2. 日本語、英語、フランス語による文献、3. 多喜二が読んだとされる文献、読んだ可能性があると思われる文献、を調査した。

筆跡確認のための資料は、

1. クロボトキン翻訳での多喜二の書き込み（商大図書館）
2. 大熊信行あて書簡（多喜二ライブラリー所蔵）
3. 雨宮備蔵あて書簡（同上所蔵）

その結果を専門筆跡鑑定会社に依頼した。以下、原文とは、多喜二の文のことである。

1-1 多喜二の書き込みがあるもの

1-1-1 書物

志賀直哉『留女』1913年（大正2年）（多喜二ライブラリー所蔵）

原文 ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきをらぎの望月のころ —— 西行

我々は、多喜二筆跡とは断定できないとしたが、専門会社は多喜二の筆跡と

した。

志賀直哉『夜の光：小説一四篇』一九二〇年 新潮社，10ページ

原文 人生そのものが思はさる

1-1-2 雑誌

西条八十「赤いカンナ」(『改造』1923年7月号)，228ページ。

原文 いやにもたせぶつた書方だ。何かありさうに思われるが、さう思わせやうと書いたのがいやだ。ことに赤いカンナの花をもつてきて。

長谷川如是閑「ヴェランダ」(『改造』1924年新年号)，273ページ。

原文 一人の心の中に起る葛藤を、AとBとをもつて、ついにBが勝つ。そして、(かういふ心理は今の社会に多くさんある。ブルジョワくせだ) その気持ちで女に当つてゆくと、シッペイ返しを食ふ。そこに、如是閑の理知的な社会批判がある。

芥川龍之介「三右衛門の罪」(『改造』1924年新年号)，284ページ

原文 所謂心理的の心理描写から、三右衛門の意識をのべたもの。そして、相変わらず、最後は、芥川らしい、頭のいゝトリックをもって終えてゐる。然し、しつかりしてゐる、と思ふ。

里見 惇「愛憎二ならず」(『改造』1924年新年号)，296ページ下部

原文 これが論理だって、アホ、もう一度 やり直せ。論理といふことも
ロクに分からなくせに人を批評するなタワケ

297ページ末尾

原文：云はうとしたことが露骨な中傷として出てゐすぎる

広津和郎「指」（『改造』一九二四年二月），96ページ

原文 つまらん小説だ。

以下はすべて、『中央公論』大正13年一月号

志賀直哉「雨蛙」168ページ

原文 平叙的で（消去部：だが）、要領を得てゐる。

169ページ

原文：説明的であるが、特徴々々をグイグイとつかんで書いてゆく。この
女がハッキリと浮かんでくる。

174ページ

原文 この辺の描写はあまりに露骨で、グッと落ちている。特殊なところ
がない。

176ページ

原文 こんな時の気持ちが出てゐる。

177ページ

原文 チョット変だ。この人らしくない。

178ページ 4 - 5 行間

原文 まるでデリケートな倫理だ!!

178ページの13-14行間

原文 微妙だ! [私たちは多喜二とは断定できない]

178ページ14-15行間

原文 リアリスティックな描写が。

179ページ 9 行

原文 そして。更にリアリスティックだ。作者は決して一つのことに興奮して、ゴマかされないところが分かる。

179ページ末尾

原文 作者はずいぶん、生活を善意に静観しているといふところまで進んできてゐる。「好人物の夫婦」を書いたあたりの気持ちだが、こゝでは、もつと、よく出てゐる。かういふ態度も、態度と思ふ。

「雨蛙」は、志賀直哉の全作品中、仕上げるのに一番手間と時間がかかった短編で、二三枚書き上げるのに約一年を要した。

小林多喜二は、志賀直哉のこの作品について読語感想を書いて、彼に送った。「中央公論の正月号で、あなたの『雨蛙』、貪るように読みました。……2回目に中央公論の終わりに書いた読語感をちっとも直さずに書きます。」「作者が如何にも人生のある事実に対して、善意に見ようとしている態度が見える。それと、もう一つは静かに見守っている態度であるように思われる。終わりの雨

蛙を見るのは如何にも偶然なことであろうが、あの作にとって、その偶然であるべきことがあまりに必然的な問題をもっているので気になった。然し、一句と雖無駄のないものと思った。書出しのあたりの要領のよさ、主人公の妻の姿、主人公の妻に対する気持ちが、簡潔な筆で、ほんとうにヴィヴィッドに出ていると思う。最後の本を焼くのは、少し常套的な気がしないでもない。」(一九二四年一月、『小林多喜二全集』第七巻、新日本出版社)

ここで2回目とは何か。この小説を2度読んで、そのとき書いたものか。それはどこに書いたのであろうか。それがこの書き込みのことなのだろうか。そうしたら、かなり違っている。「ちっとも直さずに」、とはなっていない。

菊池寛「震災余譚（一幕）」199ページ末尾

原文 微温的になつてしまつた。いつもの痛快な、人の裏をかくやうな、鋭さが無い。

然し、柄にないある人情味が出てゐる。

佐藤春夫「退屈問答」238ページ

原文 全く退屈な物語である。作者の技巧はうまい、話上手だ。そして、この事は、今の一般文壇人の生活意識に対する痛い批評でもあらう。

志賀は「万歴赤絵」の本に、昭和一〇年頃、小林多喜二の手紙を載せた。

貴司山治と志賀との対談集は、志賀の全集にある。

志賀は「灰色の月」で、「これは一九四五年一〇月一六日のことである」と書いた。その日は「朝日新聞」で虐殺写真を初めて報道した。福田が書かせた？これに志賀が、「灰色の月」で日付を書いた。

志賀は新日本文学会に入った。

『北海道新聞』2003年11月29日、小樽・後志版28面に、こうある。

表題は、「浮かび上がる強烈な自負」、見出しは「樽商大に残る多喜二の書き込み」「倉田教授ら 2万冊調査、19カ所発見」である^(注)。

本文の抜粋はこうである。

小林多喜二が学生時代に文学作品の感想を書き込んだ雑誌が母校の小樽商大付属図書館で見つかったが、志賀直哉や芥川龍之介を評価する一方、「アホ、もう一度やり直せ」とバツサリと切り捨てる作家も。

(注) ここで2万冊とは大げさである。筆者。

1-2 多喜二の書き込みがないもの

省略 別人——別人の書き込みがあるが、多喜二のは無し

芥川龍之介『煙草と悪魔』1917年、別人

有島武郎『有島武郎著作集』新潮社

第1輯「死」1918年1月

第2輯「叛逆者」1918年4月

第5輯「迷路」1918年6月 別人

『有島武郎著作集』叢文閣

第7輯「小さき者へ」1921年

第9輯「或女」1921年 別人

第10輯「三部作」1921年

第12輯「旅する心」一九二〇年

石川啄木

『啄木全集』新潮社

第1巻 1920年

第2巻 1920年 別人

大熊信行

「生産力配分の原理」(『商学討究』東京商科大学 1920-21年)

「社会思想家としてのラスキンとモリス」(『商学討究』東京商科大学 1920

-21年) 別人

河上 肇『貧乏物語』京都弘文堂 1918年 別人

菊池 寛

『文藝往来』1920年

『極楽』1920年 別人

『冷眼』1920年 別人

『藤十郎の恋』1920年 別人

『恩を返す話』1920年 別人

『無名作家の日記』1924年

『心の王国』1921年

『道理：小説集』1921年

『袈裟の良人』1923年 別人

『新珠』上下巻

西条八十『白孔雀』1920年 別人

里見 惇『第二集 三人の弟子』1917年

『善心悪心』1920年

『不幸な偶然』1920年

『潮風』(現代傑作選集：第1編) 1923年2月

島崎藤村『現代小説集』1920年 別人

『飯倉だより』1923年 別人

武者小路実篤『筆のむくまま』1924年

森 鷗外『中等国語読本』巻1から巻10, 再版1912年

巻9から巻10のみ別人

若山牧水『若山牧水集』1919年 別人

手塚寿郎『ゴッセン研究』1920年 別人

アルフレッド・ストロ 1924年4月以降の受け入れ

- アナトール・フランス 1924年 4月以降の受け入れ
 エドワード・カーペンター 同
 カーライル 同
 ジョージ・エリオット 同
 ジョン・ラスキン 同
 ジョン・キーツ 同
 スチブンソン 同
 ストリンドベルグ『赤い部屋』1920年
 アントン・メンガー『近世社会主義思想史』1921年 別人
 アンリ・バルビュス「クラルテの運動=欧羅巴の知識階級と其の思想=」
 (『改造』1922年 4月特大号 131ページ)
 『地獄』『砲火』『クラルテ』所蔵なし。
 イプセン『ノラ:独和对訳』1913年 別人
 ゾンバルト『近世資本主義とユダヤ人』1933年

2 そ の 他

2-1 乗富道夫

乗富道夫の卒業論文は、小樽商科大学の付属図書館に係員とともにコンピューター検索したが、なかった(2005年の調べ)。これは本来あるはずのものだ。不思議である。マルクスの『共産党宣言』の英文からの翻訳だった。これは教授会で大問題になった(浜林)。乗富道夫は、大正13年に小樽高商を卒業した。学籍簿によれば{小樽商科大学所蔵}、番号90、誕生 明治35年 9月11日、住所 {小樽の} 住ノ江町 4の13、「士族 鶴三郎 従姪」とあり、何のことかわからず、保証人は、叔父 山口誠一(漁業)で、住所は本人の住所に全じ、とある。原籍は、福岡県三潞郡久間田村大字間 1477。道夫は、樺太中学校を大正九年に卒業し、大正一〇年に試験検定で、小樽高商に入学した。樺太中学校は府立樺太中学校で、大泊(現コルサコフ)にあった。大正2年(1913

年) 5月2日に開校した。ただし1912年=明治45年の説もある。乗富の父は、樺太で町長をやった。弟が丈夫(たけお)といい、大泊中学を大正11年に卒業した。北海道出身という説もある(浜林)。

2-2 東倶知安

1928年の選挙応援で、多喜二は東倶知安へ行った。彼は2カ所で応援演説をした。ひとつは光壽寺である。住職は開基住職松長正念⁽¹⁾である。

それは2月12日とされる。⁽²⁾ここは浄土真宗本願寺派で、現在は京極町字京極800番地で、現住職は松長正憲さん。当時の東倶知安が40年に京極にかわった。

多喜二は東倶知安と脇方で、演壇に立った。山本懸藏の「北海道血戦記」は当時の『小樽新聞』とほぼ合致している⁽³⁾。

「北海道血戦記」では、2月11日(土)、岩内、小沢、12日(日)、国富、狩太、その後、15(水)、倶知安、とあり、『小樽新聞』では、12日、東倶知安、喜茂別、とある。12日当日の会場の1カ所は、東倶知安村・光壽寺である。もう1会場は、そこからさらに山深い脇方鉾山(三井系、1920年鉄道開通、鉄鉾石は室蘭製鉄所へ、69年閉山)である。鉾山も演説会場になっただろう集会所もいまはない。⁽⁴⁾光壽寺の本堂は、多喜二時代からのもので、畳が50畳である。15日も倶知安とあり、これが多喜二演説の日である可能性もある。

(1) 『後志の人とみち』後志支庁 1999年

(2) 「念仏のかおる里 17。」

(3) 村瀬喜文「多喜二の足跡を追う」(3)

(4) 村瀬喜文「多喜二とニセコ文学案内」

2-3 旅行

定山溪温泉を多喜二は1927年5月7日から8日にかけて訪ねている。1928年蘭島へ100人くらいと行き、1929年に拓銀の同僚18人とピクニックへ行った。

石川啄木は函館から札幌へ逃れるが、そのとき、倶知安の駅におり、「真夜

中の俱知安駅に下りゆきし、女の鬢の古き痕あと」と読み、その歌碑が駅前にある。多喜二はこの歌を滝子に教えたとされる。

1923年、多喜二が高商3年の時、嶋田とともに、羊蹄山に登った。俱知安（比羅夫）コースだったとされる（村瀬）。

2-4 温泉 つづき

多喜二は東京を出る前、昆布温泉にこもって、「工場細胞」などを執筆した。それはどこか。当時存在したこのあたりの旅館は、鯉川温泉と青山温泉である。薬師温泉も近くにあったが、地元の人にはちょっと考えられないと。⁽¹⁾村瀬氏は鯉川温泉は違うようだとする。青山温泉かもしれないと、氏は推定する。

(1) 村瀬喜文「多喜二とニセコ文学案内」

2-5 『党生活者』削除問題

『党生活者』は、初出が『中央公論』で「転換時代」として出た。この際、削除部分が五分の一あった。これらは、当時、危険とされる言葉が、もちろん削除された。それ以外に、運動に関係するものも削除された。それらは当時危険とされたものとは思えない。（以上、島田真吾）しかし運動にとって知られるとマズイと考えられるものである。双方とも編集部が自ら削除したものであろう。後者については運動の同調者が削除したのではないか。

2-6 『母』

三浦綾子の『母』は、小説でありながら、2つを除いてフィクションではないとされたし、小生もそう書いたことがある。しかしやはり、小説なので事実と実際には合わないところがある、ということがわかった。これらを調べるのも重要である。

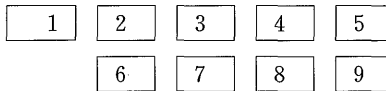
2-7 北海製罐

北海製罐は、大正10年創業で、昭和46年に本州に進出した。したがって、多喜二の時代は北海道のみである。

北海道製罐について、文献には、『50年の歩み』『70年のあゆみ』がある。同社が作った。

北海製罐は釧路にもあったが売却した。函館工場があったが、今は倉庫のみである。戦後の200海里問題で、函館、釧路がダウンした。今のホテル・クラシックが寮だった。蟹缶だけは小樽で作っている。会社には缶友クラブがあるが、多喜二の小樽時代にはまだなかった。

北海製罐の工場・会社 略図



10

港

説 明

- 1 大正13年 第3倉庫
- 2 金属印刷 大正13年倉庫 新しくなった
- 3 昭和6年 工場
- 4 倉庫 大正10年 新しくなった
- 5 他の会社 昭和製器 印刷工場
- 6 壊した
- 7 昭和10年 事務所
- 8 大正11年, 大正14年 改築。倉庫から工場へ
- 9 大正14年
- 10 水上警察詰所があった。

2-8 森良玄

森良玄は、福島生まれ、あいぬない高小を出、野付牛中学の第1期。長兵衛、シュウが両親。祖父は西光寺住職だったが、父が寺を継ぐのを嫌って、やめた。

兄弟は、長女テウ 明治30年生まれ、次女ヒサ 明治35年生まれ、鈴木家に嫁ぐ、良玄 明治40年生まれ、次男 久（キユウ）、3男 辰、3女 芳子、である。千恵子と結婚し、離婚、中神克子と結婚した。（鈴木稔氏より）

2-9 村山

村山知義（1901-1877）は、1924年に、高松の千金丹岡内家の長女、童話作家・詩人の籌子と結婚した。1930年後半、半年、豊多摩刑務所に収監された。それゆえ、多喜二とほとんど同じ時代である。籌子は夫と共に多喜二を救援したわけである。1946年8月、籌子は死去した。

2-10 浜林講演から

2005年5月、浜林正夫先生の小樽での講演から。

多喜二は、蟹工船そのものを書こうと思ったのではない。『蟹工船』でのキーワードは4つある。国際関係、軍隊、財閥、労働者である。蟹工船は、ソ連領海侵犯をしている。だから駆逐艦が来ている。それに、ソ連が置いてある網を取ってくる。

殖民地的搾取をした。「内地」という言葉がある。北海道は殖民地である。

夏目漱石は、送籍と擲揄されたことがある。沖縄と北海道で徴兵が遅れたので、夏目は、岩内へ籍を移した。

多喜二は、乗富の影響が大きかった。彼の父は町長で、弟の息子が東京にいる。

卒論は、警察に押収された？のではないか。参考（『特高月報』）

乗富は、産労の函館支部長となり、札幌は三浦強太であった。

「産業労働時報」を多喜二が読んでいたか、の問題がある。多喜二の蔵書があった。同26号である。だから読んでいただろう。この号は、浜林先生は、商大図書館に寄贈した。ここには、野呂が書いたと考えられる論説が入っている。無著名である。

2-11 雑

2-11-1 生前

多喜二の作った小林家の墓（小樽市奥沢）に戒名があるが、それは多喜二の父のそれである。宗派は浄土真宗らしい。

義兄・佐藤藤吉はクリスチャンだった。姉チマさんは子供時代に日曜学校へ通った。ちまさんの娘は、かずえさんである。

佐藤さんには妹がおり、その息子（甥にあたる）に、原斉という人がいる。母セキは親切な人だった。一度会った人を忘れない。

多喜二の最後の隠れ家は、村山籌子が世話をした。（山崎怜）

中野重治の「いわゆる芸術の大衆化論の誤り」が昭和3年6月に出た。

繰り上げ卒業は勅令であった。

林美美子は1933年の9月4日から12日にかけて、共産党に資金寄付を約束したことで、中野署に勾留された。

谷崎源氏物語の口語訳は、検閲された。

三浦強太は札幌の産業労働調査所で働いた。

青山温泉の創始者は井伊。

「独房」は、「中央公論」に1931年に出た。作品の多様化がこのころ提起された。

川端康成「浅草紅団」はプロレタリア文学に対抗した。

ベートーヴェンの交響曲第9番ニ短調 合唱は、1824年ウィーンで初演された。

小樽でタキが病院で朝6時から夜10時まで働いて、月給5円であった。

志賀は、ある本の中に多喜二の手紙をいれる、志賀「灰色の月」。

小林多喜二は自分では、「人を殺す犬」を、つまらないと感じていた、だから改作したと、学生・永坂さん。

女工さんとの話あいを、太宰の下宿でやった？ という説が、最近出た。しかし不明である。

多喜二は拓銀をやめてから作風がかわった、地下にもぐって、思想家になっ

た、と学生・和泉田。

山本厚三は、土地改革した。

多喜二は余市講演で、アリストファネスを使ったと思われる。

『新機械派』は1930年3月にでた。編集発行人は勝見茂。多喜二の「『機械の階級性』について」が所載された。

小樽映画鑑賞会発行『シネマ』昭和2年12月1日発行

幸田露伴は明治20年の夏までいた。

古賀政男作詞作曲「影を慕いて」は1931年ころ大ヒットした。(琴坂)

コップは、11の団体を含んだ。これでプロレタリア作品の発行部数が急増した。(琴坂)

いま「藤倉」に、の意味は、多喜二は藤倉電線に、宮本百合子は下諏訪へ言ったことである。

小樽の三馬ゴムは、今の貯金センターにあった。(琴坂)

小樽コップは、花園西3丁目つまり「消防番屋」の向い小路にあった。(琴坂)

囚人服(=囚衣)には、青(刑が短い)と橙(刑が長い)があった。模範囚は私的和服を着れた。

中野重治はこう書いた。

彼は随分の勉強家で……ですが、それでも、たとえば日本文学の古典にかんする教養などでは、もっと余裕のある境涯で育った人に比べて劣ったところがあったろう……多分、たとえばその点では彼の教養がそう豊富でなかったと私は思います。それはたとえば、彼が志賀直哉に送った手紙の文面などにもあらわれています。……

治安維持法で、最高刑が死刑と決まったのは、緊急勅令でらしい。

多喜二は、餅を毎朝1臼つく必要があった。終わると汗をぬぐい、背広をひっかけて出かけた。

母は、多喜二が銀行を辞めるとき、飯が食えず、夜眠れなかった。

多喜二の妹が、「通学するとき下駄の歯に雪が入ると、いつも肩につかまら

せて雪をとってくれるやさしい多喜二兄さんであった。」

多喜二はマンドリンが上手で、「時には音頭をとって家ちゅう歌ったりした」。「三吾さんと日常生活の会話を日本語を使わず、英語でやった」こともある。(石井。56-7ページ)

2-11-2 没後

三吾さんは、二〇〇三年に亡くなった。

圧倒的多数の女性が「蟹工船」に惹かれない。(フィールド)

多喜二文学碑ができた時、伊藤整、蔵原、瀬沼茂樹が、講演をした。

寺田節子は、多喜二の分骨を持っていた。

伊藤整は戦後、新日本文学会の会員になった。

「党生活者」は、わざと意識の低い笠原を出したのではないか。

ハウス・キーパー制度が、政治の手段だから悪い、と言われた。共産党はよいはずのものという前提があつて非難したのだろう、とフィールドさん。

熊沢光子について、手塚が小説を書いた。

西田信春は、橋木町の新十津川村の生まれであり、村長の息子で、札幌一中へ行き、新聞記者になる。新十津川に彼の碑がある。

森熊は二〇〇四年になくなった。

壺井栄の「種」は、多喜二がテーマだ。

小林多喜二の小牧近江あて葉書がでた。

志賀直哉あて手紙多数が近代日本文学館に寄贈され、将来紹介されるらしい。その中に多喜二の手紙があるかもしれない。

東京芸術座は、蟹工船を、1968年11月、1972年9月、1976年1月、1987年2月、1983年9月、に公演している。

小林多喜二の蔵書があつて、かなり現存している。死後、あるいは戦後、あるいは多喜二の母の死後、共産党小樽事務所に保管された。その後、小樽市立文学館に、その半分(?)が移管された。残りの半分が同事務所にあつて、その目録は琴坂氏が作成した。その目録を最近、村瀬氏が補完した。

伊藤整はいう。啄木は「悲しきは小樽の町よ歌ふことなき人々の声の荒さよ」という歌を作って小樽をあざけた。（「伊藤整全集」23巻 昭和51年）

3 不在地主

富良野には、不在地主の争議の「碑文」が北大沼にある。下記のようなものである。
／は改行。

「郷土の先達者 不撓不屈の開拓者魂を揮起して七十年、ここに先達者の／汗と涙の幾星霜を回顧せんとす。緋けば命じ三十三年、百九十余町歩／貸下げ同四十二年付与、齊藤農場創設さる。極度の湿地と泥炭、酷寒と豪雪、天を塞ぐ葎、ハン、タモなどの巨木と埋木、負けじと／開拓に挑むも初志貫徹せず幾多先人この地を去る。農場も大野農場亦同四十四年磯野農場へと移る。日本農政史に残る磯野農場小作争議は／労農提携と相俟って特筆すべき苦闘の歴史を秘む、作家小林多喜二の名作「不在地主」を生んだ争議なり、大将十一年小作料畑年貢から／物納（米）へ加えて、同十五年の大凶作により生活は惨烈を極め小作料を／巡り遂に大争議に発展、伴利八を代表とし菅原清六、奥野善造の／諸氏ら十七名の代表団、農場主磯野進氏と交渉の為小樽へ、労働組合事務所を自炊転寝の宿所とし、同志の厚い支援と婦人代表も小樽に／向かうなど長く苦しい四十四日間を闘い抜く。／昭和二年四月両者合意調停成立す。同時期町有地（風防林）の小作料も／酷しく交渉委員会設置対応す。調停後円満に推移するも自作農創設への／気運昂まり促進既成会設立、連動して町有地解放交渉委員会発足、／高松竹次氏ら努力され、昭和四十六年難交渉の末悲願の農地解放実現／一同感泣す。茫漠たる原野も河川改修と開拓以来心血注ぐ土地改良と／弛まぬ開拓者魂が結晶し、北の大地に肥沃な郷土を築く、過ぎにし／七十年の幾月を偲び「壮年会」創立二十年を記念し本事業を推進、／先達者を顕彰、幾末永く郷土の糧となるを願ひ茲に農魂の碑を建立す。／

磯野農場争議六十周年

磯野農場

昭和六十年九月三日／

町有地 解放四十五周年 「記念協賛会」

ここは初め齊藤農場であった。それは、下富良野停車場に北接して、面積193町余の農場であった。明治33年11月に齊藤三郎右衛門が貸下を受け、明治42年11月に成功付与を受けた。43年5月に大野安吉氏の所有となり、明治44年8月に磯野進氏の所有となった。その時、小作数37戸、水田55町歩余、畑地120町歩余であった。元来この農場は概して湿地なので、排水溝掘削には多大の費用を投じて改良をしていた。

齊藤農場は、空知郡下富良野村フラヌ原野にあった。土地面積は、田、畑以外に、その他が18町余あり、計193町余であった。

ここは小作経営で、放資額2万7千円だった。小作経営の年限は5年以上とし、土地開墾の難易により数程度に分かち、反当たり3円ないし4円の開墾料を給し、3ヶ年ないし4ヶ年の歛下年限、なお畑を田に変更の場合は実費を給す、小作料は各数等に区別す、田の最高4円、最低2円、畑の最高2円、最低1円である。

主要農作物の種類と最近1ヶ年の各生産額は、米2百石、小麦270石、菜豆185石である。

農場在住者の郷里別および宗教別戸数は、山形県16戸、福島県11戸、宮城県7戸、徳島県3戸、真宗 35戸、曹洞宗 2戸であった。

その他特殊の施設およびその規約には、こうある。小作者の生活状態を調査し、疾病 死亡 出産 その他 罹災の場合には、1戸40円以内の救助金を給す。

農場付近の交通の状況はこうだ。下富良野停車場に近いので、産物の輸送についてはきわめて便利であるが、農場ないし停車場にいたる道路が充分でない、また湿地なので、秋期雨天永く続く時は、泥濘で脛が没し、困難である。

ここは大野安吉、磯野進と地主が代わった。しかし大野農場という名は表面に出たことがない。同氏は富良野村の総代人だった。

斉藤農場は一旦大野安吉の所有となったが、明治44年8月磯野進の所有になった。これが磯野農場である。彼は小作争議の時、小樽商工会の会頭をしていた有力者であった。小樽で倉庫業、海産物問屋を経営した。農場に管理人をおくだけの典型的な不在地主であった。農場は管理者によって支配されたが、初代管理者は但木雄尾という農学校の先生で、その養女の婿は食糧検査員であった。

ここは見渡す限り茫々たる葦原の泥炭湿地帯であった。平坦地であってベベルイ川のほとりにあり、富良野川合流点に近いので湿地であった。開拓時代鋤下期間はなかったというが、畑作を中心とした時代は不振地帯であった。茫々たる草原に火をつけて焼き、畦をつけて水田にし、反当2俵半から3俵とった。この水田は大正10年に約20町あったという。それでも1戸分5町歩の小作株が3百円から5百円もしたのは、ベベルイ川、その他排水を利用して灌漑し、水田にする見込みがあったからである。

ところが地主はこの造田による米作の将来を見越して、反当1円50銭から3円だった小作料（いわゆる畑年貢）を、水田年貢に切り替えるという要求をしてきた。磯野争議の原因がここにある。大正12年に最高3俵から4俵半の生産力に対して、1等地、2等地、3等地の区別をして本田年貢で取り立てたから、相当深刻な問題になった。

大正15年は不作になって、1俵半から2俵の収穫なのに、最高3斗の小作料を要求してきた。管理者の但木雄尾も地主側一辺倒のところから、大争議になった。小作調停には津田泰政（町長）、杉本松次郎、平賀音蔵、小竹森槌五郎（委員）、松崎品次郎（農会長）、警察署長などが入った。

小作人55名の代表として小樽に出、小樽労働会館の2階に陣どって、四〇日かかって直接談判したのは28名という大勢であったが、次の諸氏である。阿部長次郎 水戸長次郎 伴利八 山出森一 奥野善造 菅原清六 小森善次郎 菊池力雄 成田兼十郎 松本与十八。

奥野善造の場合

彼は、小学校を卒業し、大正15年3月、22才で、同じ開拓農家・加藤の次女シゲノと結婚した。結婚は分家のための重要な条件であった。彼は独立し、大正15年4月初旬、富良野町東学田二区の顔役小林から富良野町磯野農場の小作株（4町8反歩）を三〇〇円で譲ってもらい入植した。現在の富良野市北大沼東三線北二号である。

兄の支援で草葦の掘立て小屋を建ててもらい、カマドを持った。入地した土地は造田した形跡はあるものの、草ぼうぼうの荒地になっていた。身の丈あまりの葦原を鎌でなぎ払い、ひと鍬ひと鍬 手で起こし、泥炭の畑を拓いていった。着物は盲縞の絆天に荒縄の帯をしめ、来たきり雀で年中過ごした。

住宅の入り口は雨戸がわりにムシロを吊したが、吹雪には行きが容赦なく吹き込んだ。居間も土間同然で、カンナをかけない板張りの床に荒ムシロを敷いた。冬は毎朝ふとんの襟が息で真白く凍った。一番困ったのは飲料水であった。泥炭地なので、井戸を掘っても水は出ない。キララの浮いた金気の強い排水溝の水をバケツで汲んで、ご飯を炊き、湯を沸かして飲んだ。燃料は開墾の際、泥炭層の中から掘り起こされたハンノキ、ヤダモチなどの根っこで、乾燥して囲炉裏にくべて暖をとった。

農場の小作はまず地主と小作料の契約をしなければならず、善造も管理人但木雄尾宅を尋ねて、口約束で年貢を五斗とした。

ところが、七月に入って二番草をとり、やれやれと思っていたところ、管理人から本契約をするので、印鑑を持参してくるよにとの通知があった。事務所に入ると、いきなり管理人は、「あなたの年貢米は七斗に決めたから、この契約書に直ぐハンコをつけ！」とぶっきらぼうに言った。

善造は驚いて、「まえの話では五斗ということではなかったでしょうか」と問い直した。

「いや、前に五斗と言ったが、いろいろ経費があがっているし、磯野親方に『七斗で決めろ』と言われてるんだ。どうにもならんね！」と管理人は吐き捨てるように言い切り、ハンコを押すように強要した。

「約束がちがう。まえに決めたとおり五斗にしてほしい」「いや、ダメだ」と押し問答をするうちに、口論になり、善造は管理人の要求をつっぱねてハンコを押さずに貴宅した。

八月のお盆が過ぎて間もなく、再度事務所に出頭するよう呼び出しをうけた。但木管理人は険しい表情でまくしたてた。「七斗の年貢に不満なら、さっさと出ていってくれ！」こうして管理人から立ち退きを言い渡されてしまった。

困惑した善造は兄忠治に相談した。「ともかく、契約だけはしなくてはダメだ。契約をしないで放っておけば法律を楯に立ち退き命令をくろうかもしれない。年貢米の交渉はボツボツやるとして、とにかく契約だけは済ませたらどうか」と、兄は今のところ慎重に対応するのが得策であると説得した。善造は不満ながらも、仕方なく七斗の小作料に契約した。

磯野農場の水田は客土もされていない底なしの泥炭であったので、農耕馬には藁で編んだ大きなボッコ靴を履かせて耕した。代かきの時などは馬がぬかって足が脱げなくなることも多く、その労苦は筆舌に尽くし難かった。東七線のある農家で、ぬかった馬の足が木の切り株と根の間に挟まって、どうしても脱けなかった。倒れた馬があまり暴れるので、その根を切ったが、馬の後脚も切ってしまった。また葦原を焼くと、泥炭の表面が乾燥して、いく日も地面が燃え拵がり、あやうく家屋を焼失するようなこともたびたび起こった。一反当たりの収量も悪く、扇山の一等地の半分以下であった。

善造夫婦は高い小作料を課せられていたので、馬車馬のように汗みどろになって働いた。ところが大正15年は空前の大凶作になり、すべての労苦が水泡に帰してしまった。善造の水田は4町8反歩あったが、82俵(反当たり約七斗)しかなく、それもすべて等外米という惨憺たる結果であった。当時、上川外四部会の農業技術員の大槌淳氏(後の町長)の立ち会いで作況調査をしてもらったところ、実習三分作の査定であった。しかし、大凶作にもかかわらず、但木管理人は四分作に見積もり、反当たり七斗の小作料の四分作で算出して、33俵2斗4升を定めて納入を迫った。他の小作人も同様に、過酷な年貢を取り立てられた。この凶作では小作料の減免が当然であるのに、少しも減免しないのは

血も涙もないあまりにひどい仕打ちではないかと異口同音に嘆願したが、管理人は頑として聞き入れなかった。そればかりか、先頭に立って小作料の減免要求の運動を進めていた伴利八、山出盛一、奥野善造は、立ち退き要求を受け、他の八名の小作も差し押さえ処分になった。

そこで、小作人総会を何度も開催して協議した末、このような高額の年貢を納めると、来年の作付けも困難で、飲まず食わずで暮らさなければならない死活問題であり、悪代官に等しい管理人とこれ以上折衝しても埒があかないので、今を時めく小樽商工会会頭である地主の磯野親方に直接面会して嘆願するしかないとの結論に達した。具体的な戦術として、小作人たちの精一杯の誠意を示すために小作料の三分の一の数量を小作人代表伴利八の名義で倉庫に積み上げ、その倉庫権を磯野親方に提示して窮状を訴えることにした。

このことを知った管理人は全員の立ち退きを命じ、その倉庫を差し押さえする強硬手段をとった。

昭和2年3月3日、小作人58名の中から選出された28名で争議団を結成し、富良野駅から汽車で小樽に向かった。小樽の磯野親方に直接談判するためだった。善造も争議団の一員に加わった。窮状を訴えれば直ぐ解決のめどがつかはずだと思った。磯野のダンナに会った小作人は1人もいなかった。

争議団が乗り込んだ鈍行列車は、夜九時すぎにようやく、小樽駅に到着した。あらかじめ日本農民組合北海道執行委員長荒岡庄太郎から連絡していたので、駅頭には小樽市労農党執行委員長鈴木源重をはじめ、若手の活動家三十余名が出迎えてくれた。駅前広場では「ヒゲの嚴重」こと、鈴木源重が長髯を寒風になびかせながら、激励演説を滔々とぶちあげた。善造たちは、このとき世の中にこんなに弁舌の達者な人がいるのかと肝っ玉がでんぐり返るぐらいに驚嘆した。ヒゲの源重の嵐のような演説が終わると、今度はこちらの小作の代表が答礼の挨拶を述なければならないが、争議団長の伴利八は無類の訥弁なので、善造たちは固唾を呑んで見守っていた。ところが、伴利八はいきなり土下座すると、凍った雪の上に両手をついてひれ伏し額をすりつけて、たった一言、「よ

ろしく」頼みますと叫んだきり、あとは絶句してしまった。

争議団一行は労農党の人々の先導で、駅前から隊列を整え、スローガンを書いた五本の旗をたてて、色内町の磯野事務所へ押しかけた。すでに深夜であったため、鑑戸が下ろされており、事務所の周りには、警官が一五、六名、ものものしい警戒に当たっていた。労農党の人々が、「磯野出てこい!! 戸を開けろ!!」と大声で叫んでも何ら応答がなかった。その晩は、安宿二軒に分宿したが、心配で一睡もできないうちに夜が明けた。翌4日9時ころ、磯野事務所に全員で押しかけると、「親方が留守なので私が」と、支配人の吉村直吉が親方に代わって話を聞くことになった。

伴団長は、早速持参した倉庫権を出して、「これを直接親方に渡したいので会わせて下さい」と申し入れたが、吉村は厳しい表情で、「磯野農場主が帰宅しだい連絡します。」と応酬するだけであった。支配人相手では埒があかないと、その日はそのまま引き揚げた。

翌日訪れると、吉村管理人の態度はガラリと変わり、毅然として、「農場には但木管理人がいて、小作料を取り立てのはずだ。不作で困っているといいながら、君たちは大勢汽車に乗って小樽見物にでかけてくるのは、不見識も甚だしいのではないか。一刻も早く返って、小作料全納しなければ、親方はお前達に会って下さらないだろう!!」と、血も涙もない挨拶だった。

「但木管理人では話にならるので、わざわざ出向いてきたんだ。親方に会わせなければ帰らん!!」と小作人達も口々に叫んだ。

すると支配人は、「おまえたちはさっさと帰れ!! 会わんと言ったらあわんのだ!!」と応酬して交渉は決裂してしまった。

これで争議は長期戦の様相を呈してきた。宿屋住まいは金がかかるので、労働組合の二階に引っ越した。飯場長は水戸長二郎（長次郎）が引き受け、飯米は富良野から応援してもらおう手はずを整えた。

この争議の反響は大きく、道内各地から応援米21俵と逃走資金百円が届けられて、小作たちは全員感激して泣いた。夜具は貸しふとん屋から借りて、着の身着のまま雑魚寝したが、20日くらいたつとシラミが湧いて、痒くてたまら

ず、ポリポリ搔きむしるので体中傷だらけであった。争議団の日課は、このシラミ対峙と磯野事務所に波状攻撃をかけること、ビラを配って、4、5日ごとに市内の消防番屋や集会所を借りて演説会を開催することであった。

小作人の弁士は、伴利八、菅原清六、小林善吉、奥野善造、山で森一であった。それに女房舞台の代表伴利八のおかみさんが赤ん坊を背中におんぶして、髪をふり乱しながら、「血も涙もない鬼地主!!」とテーブルをたたいて、岡山弁まる出しでわめきたたてる大熱弁はヤンヤの拍手、喝采を浴び、文字通り、千両役者の貫禄充分であった。

労農党の応援弁士は、鈴木源重、正木清、境一雄、松岡二十世、荒哲夫など錚々たる顔ぶれであった。争議団が小樽へ乗り込んだ時の市民の表情は、何かうさん臭い眼で見ていたようであったが、演説会の回数が増えるごとに、急速に争議団に同情を寄せ、指示する態度に変わってきた。

演説会は入場料を二十銭（現在での二千円くらいだろう）とったにもかかわらず、毎回大入り満員で、会場はいつもムンムンした熱気に満ちていた。演案の一角には、いかめしいアゴひもの警官が着席していて、労農党の左翼的なことばや戦術的な表現をすると、ただちにテーブルを叩いて、「弁士中止!」と叫び、二土注意を連呼しても聞かない場合は風剣をガチャつかせて、壇上の弁士を引きずりおろし、検束連行してブタ箱にぶち込んだ。

4月5日の松竹座での演説会は、入場料を30銭に値上げして開催したが、午後6時の開演にもかかわらず、午後4時半ころから聴衆が入り始め、午後5時30分には定員2千名がオーバーするという盛況ぶりであった。警察は、定員を越えたので縄を張って入場停止を行った。会場の入り口は、たちまち黒山の人だかりとなった。善造は、労組の若者と共に、入れない市民に向かって、「皆さん申し訳ありません。皆様のご支援 心から御礼申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございます。」と、大きな声で叫び続け、聴衆に向かって頭を下げながら手を振った。

こうして、20日たち1ヶ月はたちまち経過した。

先に、小作調停を申請中の小樽地裁から呼び出しがあり、伴利八、菅原清六、

奥野善造，山出森一，渡辺正吉の5名が出頭した。まず伴利八は三年前に富良野町長津田泰政，農会長松崎品治郎，警察署長の調停で決定した念書を提示して，これを履行しない地主の責任と過酷な小作料の理由について述べた。それが終わると，裁判長は地主の意見を求めた。

磯野進は開口一番，小作人代表の申し立てた念書は，自分の全く関知しないことであると，立て板に水の弁舌で反論した。双方の申し立てが終わるやいなや，訥弁の伴利八がすくっと立ち上がり，「磯野！ 知らんとは何事か！」と大声で怒鳴った。一瞬，満廷はシーンと静まり返った。

磯野はこのさらに「この念書には但木の印鑑らしいものがあるが，私のあずかり知らぬことである。この念書は偽造である！」と言い張り，両者の激論が火を噴いた。ここがこの小作争議の最大のヤマ場であった。

この調停裁判の後，小樽市会議員中島親造が調停委員として仲に入り，双方の言い分を聴取して，公平に斡旋した結果，小作人の要求どおり，一等地五斗，二等地四斗七升，三等地四斗二升，四等地三斗七升，五等地三斗三升とすることに合意がなされた。また小作契約は三年ごとに教義の上，更新することにし，大正一五年の小作料は凶作のため一年間据え置き，3年間無利子年賦払いとすることで全面的に若いが成立し，長期化した争議は，四月一〇日，急転直下解決した。

争議団一行は，四〇日ぶりで富良野に帰り，家族とともに鬭争の勝利を喜んだ⁽¹⁾。

その後

2代目管理者田中竜馬は，大正15年の小作争議後，昭和時代の管理をし，農地の自作農創設によって解放となるまでに及んでいる。

磯野農場120町歩（現在の北大沼 1，2）の自作農創設は，昭和15年に，その後の市長高橋松次が町役場産業主任となった時，ちょうど全道的に自作農創設が1つの農村対策となって打ち出された時に始まる。

高橋産業主任の意欲と指導，事務推進によって，地主も解放にかたむいた。

小作争議の時の磯野進は死亡し、すでに泰造の時代になっていた。土地は拓殖銀行の姉妹会社である北海道土地株式会社の手に残っていたも同様であって、土功組合費、地租などの諸税によって、地主の権利もうすらいでいたので、旭川の土地ブローカーに渡ることもなく、債権つきのまま小作人が引き受けることになった⁽²⁾。

(1) 『農魂一路・奥野善造伝』平成二年 14-24ページ。

(2) 『富良野町史』170-172ページ。

参考) 北海道富良野市『富良野市開庁100年記念誌 民衆が語る富良野100年のあゆみ』2004年

4 中国・河北大学での「多喜二シンポジウム」での私の報告 (2005/11/12) から。追加補遺＝報告の終わりの3分の1

報告では、私のレジュメにあるが、「2 最近の研究」「1 小樽時代」の順番で語り、ついで、次の話を加えた。

現代は、グローバル資本主義の時代と言われ、アメリカン・スタンダードである。他方で、経済的帝国主義が世界を覆っている。

日本では、小林多喜二研究が彼の生誕100年虐殺60年記念の時期を中心に多数発表された。中国のここ河北大学の研討会は、戦後60年記念に意味があるらしく、国によって多喜二研究も違っているとも言える。

ソ連崩壊でマルクス主義が退潮した。日本でもマルクス主義研究が低調になり、多くのマルクス主義学者がマルクス主義研究をやめた。しかしソ連がマルクス主義の国だったとは思えない。本当は関係がなかったのにもかかわらず、である。多喜二研究は、先にあげた時期を除いて、それに追隨して少なくなったし、同時に最近から日本で、多喜二が読まれなくなった。最近は以前に比べれば、中国でも読まれなくなった。私の小樽商大学生の調査（10年前）で

は、小林多喜二が小樽商大の卒業生であると知っているのが、真面目な300人のうち3分の2でしかなかった。

多喜二文学の意義はこうである。多くの国で時代で、多喜二文学は禁止された。これ自体、意義があるから禁止されたのだった。多喜二文学の現代的課題は、戦争や貧困のある場面には意義がある。そうすると、一部の国々つまり、ヨーロッパ、アメリカ、日本、その他の国々の、つまり発達した資本主義諸国で、それもまた、その豊かな世界・部面では、多喜二文学は意義がないように見える。実際、そういう豊かな社会では多喜二は読まれなくなっている。しかしそういう国でも、底辺にはいつも貧困がある。資本主義国だから必然である。だからそこには多喜二文学が意味がある。ついで、第三世界では、常に戦争や貧困にあえいでいる。だからそれら社会では多喜二文学に意味がある。

この発言について、会場では質問が出た。多喜二がなぜ読まれなくなったのか、と。

それに対する私の答えはこうであった。

その理由は、今述べた社会経済条件に加えて、日本では若者の活字離れ、そして新しいタイプの文学が出てきたからである。(註)

(註) この時、会場では私は答えなかったが、たとえば、日本では、司馬遼太郎、村上春樹などの文学である。古くは吉川英治。

5 蒔田栄一の思い出から

蒔田栄一は、「小林多喜二は今生で私の得た最良の友人であり、最もなつかしく思出す友人」であると書く⁽¹⁾。

彼の2つの思い出⁽²⁾から、時期の間違い、ミスプリを訂正して、再現しておこう。

多喜二と蒔田の最初の結びつきは、大正7年だった。蒔田が、満州の大連から北海道の小樽に転勤になった父に従って、小樽商業3年に転校した時である。

綴り方の時間に渡辺卓先生が「健康の必要」という題を出した。蒔田は、徳富蘇峰のような堅い文章で、健康の必要を論じた一文を書いた。次の綴り方の時間に、渡辺は蒔田の綴り方を最優秀として級全体に読んできかせて、次に小林多喜二のを読んだ。小林のは、一人の肺を病む青年と強健な青年との対話の形式で、おのずから健康の必要が理解される、仲々にすぐれたものであった。蒔田は、到底自分には遠く及ばない才能の持ち主だと小林多喜二という同級生に非常な興味を覚えた。しかしその綴り方の時間に彼は欠席していた。それは、体操の時間に機械体操の練習で彼が鉄棒から落ちて脚を折り、鎌倉病院に入院したいたからであった。

やがて退院してきた小林はと見ると、背の低い小さな男であったが、その顔は、眉の秀でた治世のひらめく顔で、服装はいかにも見すばらしかったが、どこもなくノーブルなところがあった。このノーブルなところは、プロ作家でありながら彼が死ぬまで失わなかった。

2人は綴り方がとりもつ縁ですぐ親しくなった。彼の弁当はパンばかりだった。伯父のパン屋にやっかいになって、パンを配達していた。学校の勉強はあまりやらなくても、非常によい成績をとった。糞勉強をして一番や二番になろうなどは、彼は思っていなかった。否、そんな連中は、先生のノートを丸暗記するだけなのだから「蓄音機」だといって、冷笑していた。けれど同じ学年の生徒百五十名仲四番か五番にいた。如何に彼が秀才であったかがわかる。

蒔田たちは短歌をつくり、詩を書き、小説をかき、また画をかけた。大正八年九年ころの『文層世界』には、彼の歌や画がいくつも掲げている。これは博文館から出ている文学雑誌で、文学青年は皆これを読んでいた。毎日学校の帰りは兩人並んで坂を下りて、妙見川の橋のところで別れた。道々十分くらいは、文学を語り将来の希望を語った。ある時口喧嘩をして、唾イサ右多喜二もしないで別れたことがあった。2、3日、学校で逢っても口をきかなかった。そおあとで、蒔田はたまらなくなり、

むきむきのところが遂になごまねば、道にだまりて別れしふたり

という歌を添えて、仲直りの手紙を出した。すると丁度蒔田の手紙が向こうに着くころ、彼からも行き違いに仲直りの手紙がきた。(35-6ページ)

蒔田は小樽商業の卒業試験を了るや否やその晩立って東京外語の入学試験をうけに上京したが、出立の日の午後学校の帰り、稲穂町のバーで、ビールとライスカレーで蒔田の壮行会がひらかれた。多喜二と片岡と灰野と、岡本彦市と蒔田であった。もう卒業試験が終わったのだからビール位構うまいと気焰をあげたわけである。多喜二はその年目度く小樽高尚に合格し、蒔田は東京外語英語部に合格した。3年ののち、蒔田は偶然にも、小樽高尚に講師として赴任した。

多喜二は卒業して拓殖銀行小樽支店に勤務していたので、時々逢った。英文学以外の外国文学のことは彼にきけば何でも知っていたので、彼の話聞き方が本をよむより好かった。とに角あの男ほど文学を愛し文学をよく知っていた者はなかつたらう。(36ページ)

「クラルテ」は、カンバスの表紙に油絵が書いてあった。灰野文一郎が主として表紙を描いた。牧田は歌ばかり書き、多喜二は小説を書いた。片岡亮一は歌を書いた。彼は後に日本銀行の貯蓄推進部長というかなり高い地位についた。片岡は当時の地位を守る必要からか、多喜二の親友であったなどとは、オクビにも出さないようになったのは残念である、と蒔田。

多喜二の英語力は小樽商業学校の5年間と小樽高商の3年間の勉強による。

蒔田は、小樽商業の5年のうち最後の3年間、共に津暮れを並べて学んだ仲である。つまり同じクラスにいたということであろう。その3年間は同じ教師について学んだ。3年の時には教諭心得の千葉繁雄に就いた。千葉は、独学の人で非常に英語がよくできて特色のある教科書を使用した。田丸鉄哉著の副読本だった。それはイギリスで集めたピラ、広告、受け取り、掲示などを、教材にしたもので、Commit No Nuisance などということを知った。5年では宮

本英一郎に習った。彼は検定出で、実によく出来る人で解釈力作文力は抜群だった。蒔田は、「よくもこんな素晴らしい先生が北海道にいたものだ」と感心した。小樽商業には、学校出の先生も沢山いたが、検定の宮本、教諭心得の即学の千葉が一番よい先生だった、と蒔田は書く。

小樽商業を出ると同時に、多喜二は高商に合格した。浪人をせずに合格したのは、足立、金井、小林の三名だけだった。足立は無試験合格で、試験合格は、ガリガリの勉強家の金井と、多喜二だけだった。⁽³⁾多喜二は不勉強で小説ばかり書いていて、それで相当の成績を残した秀才であった。同級の者は、翌年、7、8名が浪人生活を経て、入学した。高商で多喜二は、名教授浜林生之助に習った。だから多喜二の英語力は相当なものであったと、思われる。高商で習った英文学の教科書の外はあまり原書で読んでいないと、思われる。多喜二は翻訳を通しては、ロシア、フランス、ドイツの文学を乱読し、実によく知っていた。彼の日記を見るとよい。

多喜二には翻訳劇が1つある。高商在学中に浜林教授から習った *Sutro* の一幕物 *The Man of the Curb* である。ストロ (1863-1933) は、ロンドンに生まれ、フランス語に堪能で、メーテルリンクの翻訳者である。一九〇四年に現代社会生活を皮肉に描写した戯曲 *The Walls of Jericho* で成功した。社会主義的題材を取り扱ったものもあるが、軽快な humor の中に現状の世相を風刺した。この劇 *The Man of the Curb* は、プロレタリア文学に近い内容を持っているから彼はそれに惹かれたのであろう。そしてその完訳を、語学的に検討してくれとあって蒔田の手元によこした。蒔田と共訳ということで彼は発表の場を待っていた。蒔田はある友人の言葉を信じて、この貴重な原稿を福田久道という男に人を介して渡した。彼はドイツ文学の翻訳家で、1930年ころは少しは名前を知られていた。彼は木星社という出版屋をやっていた。この原稿はそれ以来うやむやの中に葬られて、杳として消息がわからない。多喜二の名訳に蒔田の註をつけて現れるべきであったが、実に惜しいことをした、と。もし現存すれば多喜二の唯一の翻訳であろう、と。

(以下、蒔田の思い出が続くが、まだよく分からない部分があり、それらは調べないと、書けないので、途中であるが、ここで終わる。)

- (1) 蒔田栄一「小林多喜二と英文学」(日本英文学会機関誌『英文学史研究』第4号 1972年4月) 49ページ。
- (2) 注(1)および、蒔田栄一「若き日の小林多喜二」(『英文法研究』 Apr. 1958 Vol.11. No.1.) 2つの文献を浜林正夫先生から頂戴した。ここに感謝したい。
本稿では、『小林多喜二全集』にあること、よく知られていること、および拙書にあることを除いて、紹介する。
- (3) ここで、小生は『小林多喜二伝』で、試験合格は多喜二だけとしたので、誤った。

6 参考文献

下記は、拙書『小林多喜二伝』(論創社)の参考文献の1部である。膨大な本だったので、経済的理由で付けられなかった。

作品集

- 『小林多喜二全集』全15巻, 新日本出版社
- 『定本 小林多喜二全集』全7巻, 新日本出版社
- 『ザ・多喜二』第三書館

雑誌・新聞

- 『大衆の友』号外 昭和8年3月10日
- 『文芸北見』第22号
- 『赤旗』1933年6月21日
- 『北方文芸』171号

『北海道新聞』2001・6・20朝刊

『クラルテ』第1輯-第5輯

『緑丘』56号, 59号

『民主文学』1984年2月

『小樽新聞』昭和2年3月8日, 四面

昭和2年3月10日, 三面

1926年11月30日

『竹やぶ』No.17

緑丘会卒業四十周年記念文集『回顧』1962

「いしだゼミの友」No,26,30.

『海風』

『新日本歌人』1973 臨時増刊28巻3号 渡辺順三追悼特集

書物

あ行

『秋田と小林多喜二』同刊行会

『磯野小作争議・小樽港湾争議資料集』不二出版

伊藤整『若い詩人の肖像』新潮文庫

『伊藤整全集』新潮社

因藤莊助「多喜二のプロフィール」

江口渙「多喜二と百合子」

江口渙『たたかいの作家同盟記』上下 新日本出版社

『小樽 小林多喜二を歩く』新日本出版社

小笠原克『小林多喜二とその周囲』幹林書房

小笠原編『小林多喜二』日本図書センター, 年譜, 党生活者(抄)

『小樽の女性史』小樽市

小樽商科大学『緑丘五十年史』

荻野富士夫「碧川企救男小論」(『初期社会主義研究』1999. 第12号)

『小樽高商の人々』北海道大学出版会 2002年
 小田切秀雄『小林多喜二』
 小田切・福岡『昭和書籍・新聞・雑誌発禁年表』

か行

亀井秀雄「小林多喜二「遺体写真」撤去について」（『市立小樽文学館報』第26号，平成14年12月25日）
 川端康成「三月文壇の一印象」（『新潮』昭和8年4月）
 金倉義慧『画家 大月源二』創風社
 『ガイドブック 小林多喜二と小樽』新日本出版社
 金原左門『昭和への胎動』=昭和の歴史 1，小学館 1988年
 片岡『雪田』
 貴司「小林多喜二の人と作品」（『改造』1933年4月）
 蔵原惟人『小林多喜二と宮本百合子』
 倉田 稔『大塚金之助論』成文社
 くらせみきお『小林多喜二を売った男』白順社
 倉田喜弘『日本レコード文化史』東京書籍
 越崎宗一『郷土史的自叙伝』
 小林峻一・鈴木隆一『スパイM』文春文庫
 『小林多喜二研究』日本図書センター
 『小林多喜二 生誕100年没後70周年記念シンポジウム記録集』白樺文学館
 多喜二ライブラリー

さ行

沢地久枝『続 昭和史のおんな』文春文庫
 沢地久枝『わが人生の案内人』文芸春秋
 沢地久枝『石川節子』講談社
 佐藤八郎，編・著『ネヴォの記』自費出版1976年

佐野英彦『遠い道』1981年

『志賀直哉全集』

『新潮日本文学アルバム 小林多喜二』

『写真集 小林多喜二』新日本出版社

下里正樹・宮原一雄『日本の暗黒』第3部, 新日本出版社

曾根博義『伝記 伊藤整』六興出版

斉藤勇『日本共産主義青年運動史』

た行

高橋利蔵「多喜二ゆかりの小樽と交流を」(『北海道新聞』2003年2月12日,
札幌圏)

『啄木と小樽・札幌』みやま書房

多喜二・百合子研究会編『小林多喜二読本』新日本出版社 1974年

『拓銀史』

立花隆『日本共産党の研究』上下, 文芸春秋

『武内清の思い出』

鶴見俊輔『戦後日本の精神史』

土田秀雄『歌集 氷原』

『手塚英孝著作集』第2巻 新日本出版社

手塚英孝『小林多喜二』上下 新日本出版社

『手島恒二郎伝』

土井大助『よみがえれ 小林多喜二』本の泉社 2004年

土井大助『青春の小林多喜二』光和堂 1997年

な行

夏堀正元『小樽の反逆』岩波書店

西野辰吉『石狩川紀行』NHK 出版

『日本共産党の歴史』共産党

能村敏治『坂の道』

中津川（『新蝦夷草子』）

は行

布野栄一『小林多喜二の人と文学』幹林書房

布野栄一「小林多喜二の遺稿断片」（岩波書店『文学』1958年9月）

ノーマ・フィールド「小林多喜二「栄養検査」その他」（『市立小樽文学館報』
第26号，平成14年12月25日）

『北海道文学史』

ま行

『正木清伝』労働旬報社

松沢信祐『小林多喜二の文学』光陽出版社 2004年

松本清張『昭和史発掘』5，文春文庫

松本剛『野呂栄太郎』信州白樺

『宮本百合子選集』

三浦綾子『母』角川書店

村上由『北海道 労働運動ものがたり』共産党北海道

村山かず子『村山知義』

宮下弘『特高の回想』田畑書店

宮本百合子「同志小林多喜二の業績」

マイエンブルグ『ホテル・ルックス』晶文社

や行

安田徳太郎『20世紀を生きた人々』

安田徳太郎『思い出す人々』青土社

山田清三郎『プロレタリア文化の青春像』新日本出版社

山田清三郎『プロレタリア文学史』上下 理論社

山田清三郎『転向記』上下 理論社
 矢沢寛『自由と革命の歌ごえ』新日本新書
 『資料集』

わ行

渡辺惣蔵『北海道社会運動史』レポート社

抽書出版後の文献追加

倉田「『蟹工船』」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 平成17年2月号)

倉田「補3」

倉田「補4」

近藤典彦「小林多喜二」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 平成17年2月号)

大崎哲人「小林多喜二が小牧近江に当てた葉書」(『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 平成17年2月号)

松本忠治『ロシア文学と小林多喜二』東銀座出版局 2004年

浜林正夫『小林多喜二とその時代』東銀座出版 2004年

前号, 補(4)の間違い

正 誤

10ページ 9行 1940年 昭和40年